他者への共感を育てる教育プログラム
カナダの『共感教育』の実践とその有効性
—幼児期から始める親になるための準備教育—

An Educational Program to Grow Empathy toward Others
The Practice and its Effectiveness of "Roots of Empathy (The theory of empathy education)"from Canada
—The preparatory education to become a parent started from early childhood—

子ども家庭リソースセンター
永田陽子（東村山市幼児相談室）、櫃田紋子（湘南短期大学）、福川須美（駒沢女子短期大学）
伊志嶺美津子（関東学院大学）、田島昌子（彰栄保育福祉専門学校）
Child Family Resource Center
NAGATA,Yohko (Higashimurayama Consultation Room for Children) HITSUDA,Ayako (Syonan Junior College) FUKUKAWA,Sumi (Komazawa Women's Junior College) ISHIMINE,Mistuko (Kanto Gakuin University) TAJIMA, Masako (Syoei Kindergarteners and Welfare-workers Training College)

＜要　旨＞

カナダではM. ゴードン氏により創始された幼稚園から中学生までを対象とした共感性を養う教育プログラム「共感の根っこ」（ROOTS OF EMPATHY＝ＲＯＥ）が学校教育の中で実践され、共感性や養育性の準備教育に寄与している。ＲＯＥは１組の乳児と親の協力を得て、１年間に亘り学校教育の中で現代に失われつつある共感性などを学ぶものである。本研究はＲＯＥの日本での有効性の検討が目的である。対象は東京都東久留米市立第十小学校の５年生２クラス生徒５５名である。生後３ヵ月の乳児とその親の協力を得て10ヵ月間（2001年6月～2002年3月）に、5回の親子の教室訪問とその前後の事前事後学習、計13校時をインストラクターと担任との協力で行った。評価は、各回のアンケート・感想などで行った。結果は、ＲＯＥに対してよいと思う87%、よいと思わない7%とほとんどの生徒が授業を肯定的に捉えている。具体的には、命の大切さ、赤ちゃんの感情や成長、世話について学べたと生徒は評価し、自己肯定感が増していた。家庭でも親子の会話が増え、保護者からも高い評価を得た。今回のＲＯＥ模擬実践から日本の文化にあわせた丁寧な実践をすれば、十分な効果がありＲＯＥを導入する価値はあると考えられる。しかし、日本で実践をするにあたり、インストラクターの養成やプログラムの内容等に関して、ゴードン氏の認可が必要とされ、どのような取り組みが可能か大きな課題である。

＜キーワード＞
共感性、養育性の準備教育、命への慈しみ、自尊感情、

１、はじめに

我々、子ども家庭リソースセンター（ＣＦＲＣ）では、メンバーの臨床心理や社会福祉の専門性から、かねてより問題が発生してからの問題対処型の対応に加え、社会の養育性を高め問題化することを防ぐ予防的な観点を持った対応を模索、研究してきた。カナダは

行政が準備する支援だけでなく、住民のボランティアの参加を得て子育て支援のさまざまな活動を実践し、住民が主体的に地域作りをしている社会である。カナダのさまざまな活動は予防的な役割を果たしており、我々は1990年代より、カナダの子育て家庭支援に注目し、研究を続けてきている。

学校の空き教室を利用し親子が気軽に集える場・ペアレンティングセンターを創設したM. ゴードン氏と1997年に会い、「共感の根っこ」(ROOTS OF EMPATHY＝ＲＯＥ）教育プログラムの実践に関する情報を得た。ＲＯＥは幼少期から学校教育の場面を利用して共感性を養いひいては養育性の準備教育ともなることを目的としている。この予防的観点を持つＲＯＥプログラムの日本での有効性を検討するために、今回の実践を計画した。その有効性を検討していく上で、2001年9月にプログラム創始者ゴードン氏招聘の予定があったため、来日の折にはゴードン氏の行う授業も含めた計画を立てた。日本の状況をゴードン氏に理解していただいたうえで、ゴードン氏と検討することも目的である。

2、ＲＯＥの紹介

ＲＯＥは『共感の根っこ』と呼ばれるように赤ちゃんの持つ豊かな感性を借りて、生徒たちの共感性を育む教育プログラムである。生徒たちは赤ちゃんを持つ親の協力で、学級内で約 10 ヵ月間ひとりの赤ちゃんの成長過程と親子の愛情あるかかわりにじかに触れながら学ぶ。そして赤ちゃんの発達理解、他者への共感性や思いやり、自尊感情、命への慈しみ、ひいては養育性を育んでいく。

①授業の構成：授業は学校近くに住む１組の親と赤ちゃん、プログラムの実践資格をもったインストラクター、学級担任、生徒たちで構成される。赤ちゃんはこの授業がスタートする時点で生後２ヵ月～４ヵ月であることが望ましい。それは乳児の学級訪問の期間が一生の中でもっとも著しい発達を遂げる時期にあたることによって生徒たちが感動的に学ぶことができるからである。また、最終回にお誕生祝いをして締めくくることもできる。父親の協力は生徒たちに健康な父親モデルを示すために重視されている。

②プログラムの構成：３つの要素から構成される。インストラクターによるプログラム開始前の家庭訪問（１回)、親子の学級訪問(月１回を９ヵ月継続)、そしてインストラクターによる事前・事後の学級訪問（毎月２回を９テーマに実施）で、総数27回の授業となる。

③カリキュラムの構成：構成は、全学年に共通で、カリキュラムの中心である赤ちゃんの発達、行動、世話について学べるように以下のような９テーマが設定されている。生徒の年齢により、幼稚園・プライマリー（小学1～３年生）・ジュニア(小学４～6 年生)・シニア（中学 1～２年生）の４レベルに応じて用意されている。授業内容は学級担任も企画の段階から参加して他教科との関連をもたせて決められる。１回の授業時間は、幼稚園25～30分、その他の学年30～40分である

1. Meeting the Baby
2. Crying

3. Caring and Planning for the Baby
4. Emotions
5. Sleep
6. Safety
7. Communication
8. Who am I?
9. Good bye and Good Wishes

④インストラクターによる授業：インストラクターは、はじめに親子の家庭訪問をし、教室で実施される内容についてよく話し合っておく。また、赤ちゃんの写真をとり第一回目の事前授業で生徒に見せて自分たちの学級に来る赤ちゃんに関心を持たせるなど授業の導入を工夫する。そして、生徒が赤ちゃんの行動や感情を深く理解することができるように、その観察に応えたり方向づけたり、発達指標に気づかせたりする。事前・事後の授業で、生徒たちは赤ちゃんの訪問で全員が体験したことの意味を学び合い、また自分たちの体験に置き換えて赤ちゃんの感情をより深く理解したり、各回の活動のねらいと関連づけて学習を深める。

なお、地域での生徒と親子の交流も考慮し、協力家族はできるだけ実施校の設置されている地域に住む方を探す。

3、日本での実践にいたる経緯

ＲＯＥは環境の整った家族の集まった学校ではなく、さまざまな背景を持つ家庭の子ども達が通学する学校での実践を狙っている。日本での導入の可能性を検討するには、公立小学校での実践が適切と考え、公立小学校教諭と検討をした。公教育での実践は当然学校長、教育委員会の許可が必要であり、ＲＯＥ、ＣＦＲＣに関する理解を得て、今回の実践となった。教育委員会からは、学校指導要領を基盤に考えそれに従うこと、総合的学習のねらいに沿うこと、保護者の理解を得る努力をすること等々の点に関して指導を受けた。

ＲＯＥはインストラクターが担任との協力で授業を進める。ＣＦＲＣのメンバーは1998年、当時ゴードン氏の所属するトロント教育委員会の招待でＲＯＥのインストラクター研修を受け、その資格を授与されており、今回の実践では２名のインストラクターが担当することになった。

協力者である乳児への安全や緊急時の対応として、赤ちゃんの学校訪問の時には助産婦・保健師の同席を設定した。

協力家族は、乳児の体力などの点からもできるだけ近隣に居住していることが望ましく、学校設置市近辺での協力者を探し依頼した。

4、学校教育の中での位置付け

ＲＯＥは、ゴードン氏の優れた発想のもとで体系的、組織的に作られたプログラムである。日本の学校教育の中で実践していくためには、ＲＯＥの授業を支える環境が必要である。2002年４月から新学習指導要領のもとで小学校３年生以上に、教科横断的な内容を学ぶ総合的学習の時間が始まり、授業内容を各学校裁量で決められるようになったことで、ＲＯＥを公立学校で実践することの可能性が拡がってきた。体験を重視した主体的な学びの促進や自ら考える力を育てることを目指した新しい学力観はまさにＲＯＥの理念や教授

法とも通じるものである。学習指導要領に基き、正規の授業として、他教科との関連性のある授業を実践していくために、インストラクターは学級担任と常に綿密な共同作業を進めることが大切である。しかし、実際的な問題として年間 27 回の授業を実践することは容易ではない。今後に多くの課題が残されている。

5、実践の内容

今回の実践は、試行段階の総合的学習の一環として行ったので、時間的制約からＲＯＥ全セッションを実践することはできなかった。そこで以下のように４テーマに絞り、最後に１歳の誕生日をみんなで祝うというプログラムとした。

各回の授業ごとに担任教師とインストラクターは打ち合わせ会を持って指導計画を作成した。授業内容の検討、他教科との関連、指導要領との整合性など、ゴードン氏とも直接連絡をとって指導を仰ぎながらも、具体的な点では担任の助言を得て、実践校の児童に適切な内容・方法を工夫した。

（１）総合的学習における位置づけ

実践校では対象の生徒が低学年のときに、保健の授業で赤ちゃん人形などを用いて自分の誕生や命に関しての学習を行っている。そのような学習をベースに、今回の総合的学習では『命の大切さと自分の成長を知る』単元としてＲＯＥの実践を計画した。小学校の５年生は思春期前期にあたり、自己と他者との間で自己形成に揺れ動く時期である。生徒の間では主張ができるようになる反面友達との葛藤も見られる。自分が慈しまれて育てられたかけがえのない存在であることを知り、自分を愛することができるように、また他人の心にもふれ、その気持ちに共感できる思いやりややさしさ、心のゆとり、生命への慈しみがもてるように、この学習を設定した。

（2）対象および実践期間

対象は東京都東久留米市立第十小学校の 5 年生２クラス、児童 55 名である。高層の団地が建ち並ぶ地域にあり、団地に住む世帯と代代地域に住む世帯の子ども達である。共働き家庭に育ち鍵っ子で放課後を過ごしている子もいる。

１組　男子 14 名、女子 14 名　Ｙ女児（‘01, 4, 7 生）と両親	計 28 名
２組　男子 14 名、女子 13 名　Ｈ女児（‘01, 4, 1 生）と母親	計 27 名

＊Ｙ児の父親は、３回の参加であった。

実践期間は2001年６月より2002年３月まで。

（３）実践の経過

[i]協力家庭への事前家庭訪問

インストラクターは、プログラム開始前に協力家庭を訪問し、信頼を深め、赤ちゃんの様子を知る。

６月 20 日　Ｙ児（２ヵ月 13 日）と母
（東村山市在住）

６月 27 日　II児（２ヵ月 27 日）と母
（東久留米市在住）

[ii]「赤ちゃんとの初めての出会い」

このセッションの主な目的は、赤ちゃんの感覚の重要性や脳の発達には愛情の必要なことを学ぶことである。

① 事前学習

6月28日　2校時1組／3校時2組

②生後3ヵ月の赤ちゃん

7月5日　2校時　1組と親子

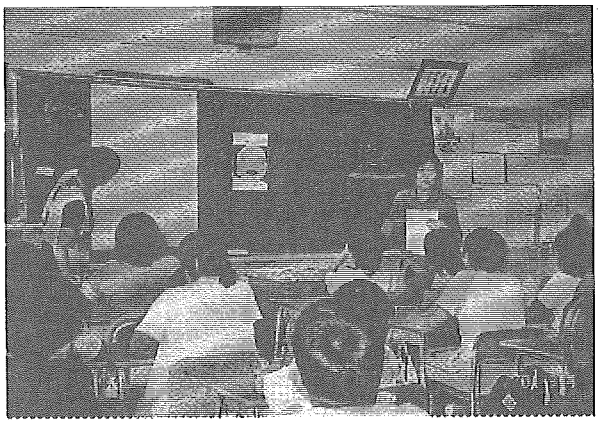
7月5日　3校時　2組と親子

③事後学習

7月10日　2校時1組／3校時2組

＊ 写真1「泣く」の事前学習

:担任との共同作業で授業を進める



[iii]「泣く」

このセッションの主な目的は、“泣く”ことが、赤ちゃんのコミュニケーション手段であることを知る。泣く理由を理解したり、なだめる方法を学ぶ。揺さぶる危険などについて学ぶ。

① 事前学習（写真1参照）

9月4日　2校時1組

／3校時2組

・ ゴードン氏や関係者等見学

② 生後5ヵ月の赤ちゃん

（写真2参照）

9月7日　2校時　1組と親子

9月7日　3校時　2組と親子

・ゴードン氏／通訳による授業実施

③事後学習

9月13日　2校時1組／3校時2組

[iv]「気持ち」

このセッションの主な目的は、赤ちゃんのさまざまな感情表現を理解し、一人ひとりの感情の重要性に気づく。

②事前学習

11月7日2校時1組／3校時2組

②生後3ヵ月の赤ちゃん

11月21日　2校時　1組と親子

11月9日　5校時　2組と親子

③事後学習

11月30日4校時1組／5校時2組

＊写真2「赤ちゃんの教室訪問」

:ゴードン氏の授業

[v]「私はだれ？」

このセッションの主な目的は、赤ちゃんへの親の思いなどを知り、その人らしさを作っていることについて考える。

①事前学習

1月25日　3校時1組／4校時2組

②生後10ヵ月の赤ちゃん

2月6日　3校時　1組と親子

2月6日　4校時　2組と親子

③事後学習

2月13日　3校時1組／4校時2組

[vi]「お誕生日おめでとう」

この回の主な目的は、赤ちゃんの1年間の成長を振り返り、協力親子への感謝を表す。

3月13日　2校時　1組と親子

3月13日　3校時　2組(H児病気のため親子不在)

（4）指導案について

ここでは、第2セッションのテーマ「泣く」に関する指導案概略を述べる。

[導入]

・親と赤ちゃんに挨拶する

・事前学習で予想した「泣く時の赤ちゃんの気持ち」を親に確かめる。

[展開]

・泣き止まないときの親の対応について聞く

・親はなぜ泣くかを考えてなだめていること、赤ちゃんの気持ちを推測することが大事だということを知る。

・赤ちゃんが玩具をとろうとして身を乗り出すなど赤ちゃんの遊ぶ様子を観る。この時、脳が働いていることを学ぶ。

・体全体で感情を表現する様子を観察する。

・揺さぶることの危険を学ぶ

[まとめ]

・協力親子に感謝をする。

・生徒のコミュニケーション手段に思いをめぐらせる。

・授業後のワークシートに感想などを記入。

6、評価と効果

・評価　どのような効果があるかを評価するために、カナダでも施行されている参加者全員対象のROEの評価アンケートを実施。その他に、毎回の授業のアンケート・感想、親による家庭でのROEへの評価と感想、担任によるROEの評価などを施行した。

・結果　ROEの参加児童55名の評価からみると、他の子ども達にROEがよいと思う87%、思わないが7%で、圧倒的に参加児童は肯定的に評価している。また、ROEで何を学んだかを聞いたところ、命の大切さ（14名）、赤ちゃんの感情について（10名）、赤ちゃんの成長（13名）、頭を揺さぶると脳が傷ついてしまう（2名）、赤ちゃんの生き方（2名）などがあげられている。また、かけがえのない自分について学んだと記入した生徒もいた。生徒個人の変化では、自分を優しいと判断するなどの自己肯定感を持つ生徒が増えた。

23人の親からのアンケートが回収できた。そのアンケートによると、全家庭で授業についての話し合いを子どもとしていた。その中で1～2回が4名で、19家庭は赤ちゃんがくる度にあるいは頻繁にROEに関連する会話

があったという。ＲＯＥの前半は自分の小さいころのことに関心を示し、後半は赤ちゃんの成長ぶりについて親に話をし、子どもなりに自分のクラスの赤ちゃんの成長を楽しみにしていたり、やさしい気持ちを持つようになったと思うなど、親たちの感想は肯定的なものばかりであった。体験を通した学習の機会が与えられ子どもと親との対話が活性化されることを望んでいるなど、今後への期待の記述もみられた。

協力家族は、ＲＯＥ参加を肯定的に捉えている。皆に我が子が見守られている思いを持ち、プログラムの終了を残念に感じたという。

ＲＯＥは共感性や将来の養育性の準備教育などさまざまな点で、その教育効果が期待できる予防的プログラムと判断できる。しかし、日本に導入するには指導要領とのすりあわせなど十分な検討が必要である。

・　提言　文化の異なる日本の教育に導入するには、日本の文化や教育体制、子どもの傾向などを考慮した内容を検討していく必要があることも明らかとなり、次の提言をしたい。①学習指導要領との整合性の検討が不可欠である。インストラクターが指導要領を理解することなども含め、カナダ以上に準備の段階から担任との協力が必要である。②今回は赤ちゃんの安全や緊急事態への対応のために、赤ちゃんの学級訪問時には、助産婦または保健師が同席した。学校の普段の安全管理に加え、赤ちゃんへの安全対策も必要である。③日本の学校教育は、国としての指導要領が決まっており、ＲＯＥプログラムの全セッションを実践することは困難を伴う。効果をあげるためには、その回数や授業内容の検討を丁寧に行い日本文化・教育に適合した内容にしていく必要がある。

ゴードン氏の2001年9月の日本講演では、ＲＯＥに関して語られ、300余名の出席者からは、熱心な意見や感想が寄せられた。主旨への賛成の意見、保育現場に新しい風が取り込めそう、赤ちゃんを育てる大切さを子どもの時から学ぶことに大賛成などの感想が寄せられた。また、内容や研修プログラムをもっと知りたいとの意見も多く見られた。

以上のように、日本での反響はたくさんあった。今回はフルセッションではなく、模擬実践であったが、日本の文化にあわせた丁寧な実践をすれば、十分な効果がありＲＯＥを導入する価値はあると考えられる。しかし、日本で実践をするにあたり、インストラクターの養成やプログラムの内容等に関して、ゴードン氏の認可が必要とされ、今後どのような取り組みが可能か大きな課題である。

付記：本研究・ＲＯＥの模擬実践にあたり、東久留米市教育委員会および東久留米市立第十小学校望月満校長先生、お忙しい中長い間に亘りご協力いただきました牧野京子教諭、覚前幸子教諭に感謝申し上げます。また、快く学級訪問をしてくださったゆいちゃんご家族とはるかちゃん母子に、また、赤ちゃんの安全面をみてくださった池田真弓さん、増田恵美子さんにも心から感謝いたします。